

三韓社会における辰王と臣智（下）

武田 幸男

一 序言

二 臣智・邑借の新解釈

1 臣智・邑借の語義

2 臣智と辰王

3 臣智と中国の諸郡

4 臣智と邑借の来歴

三 辰王の史的性格

1 辰王の存否問題

2 辰王「率善」官の体系

3 辰王の対外的性格

4 辰王と公孫氏政權（以上前号）

四 辰王と諸韓国の関係

1 月支国の所在地

紀元三世紀の頃、魏書韓条当時の辰王は、対外的な性格を特徴とする

四 辰王と諸韓国の関係（以下本号）

1 月支国の所在地

2 辰王「加号」の対象

3 「加号」にみえる四国の意義

4 辰王と三韓諸国との関係

五 辰王をめぐる諸問題

1 辰王王位の継承と非自立性

2 中国史書の辰王像

3 辰王興起の事情

4 辰王滅亡の背景

六 結言

最高首長であつたが、三韓諸国の全体に君臨する専制君主として振舞う存在などではなかった。しかし、かれは従来の伝統的な在地秩序に則つた有力な在地勢力であり、多くの諸韓国首長に影響力をもち、かれらを限定的な形で統率していた。そこで、辰王と諸韓国との具体的な関係に

ついで、これを限定的な視野から検討しておく必要がある。

第一に問題とすべきは、史料(A)の「辰王は月支国に治す」の検討であるが、その焦点は辰王が治所とした月支国の所在地である。もっとも、論者によつては「治」字を下文の「臣智」にかけ、「辰王は月支国の臣智を治む」とよむが、これは不適當であろう。或る君主を最初に紹介するにあたり、まず特定の人物をあげて、かかを「治む」と記述するのは普通の例ではない。ここでは、魏書韓条において辰王を始めて紹介するにあたり、まずその治所を示したのである。

治所の「月支国」は、馬韓五〇余国のなかの一国である。馬韓ならば、常識的に朝鮮半島の中南部、それもその西側と限定されてくるので、おおよその見当はつくのであるが、しかしいまなお特定するに至っていない。これまで出された候補地には、ソウル(慰礼城、位置不定)、京畿道の仁川、忠清南道の稷山・成歆面(天原地域)、同道の礼山、全羅南道の羅州・潘南面などに比定する諸説がある。³⁴ みな有力であり、どれが当たっているのかどうなのか、判断に苦しむところである。

ただ留意してよいのは、魏書韓条に列挙された馬韓諸国のうち、月支国は一四番目ということである。これまで、馬韓五〇余国の全てにわたつて、それぞれ位置比定を試みた考証もある。³⁵ それらの比定にはそれぞれ違いもあり、その確定は後日に残すものが少なくないとはいえ、国名列挙の順序におおよそ一定の傾向があつて、ほぼ北から南へ向かうと指摘されている。この指摘は、確かに注目すべきである。

そこで、筆者なりに、列挙国名のうち幾つかの重要地名をとりあげ、そのうちほぼ確実とおもわれる位置の比定をおこない、月支国の所在地

域を推定してみたい。まず、二番目の「牟水国」は、著名な『廣開土王碑』(四一四年建立)に「新来韓穢」の一城としてみえる。それはおそらく四世紀初頭を前後して百済に吸収され、その後、たぶん永樂六年(三九六)に百済五八城の一つとして高句麗に併合されたものとおもわれ、³⁶ 魏書韓条から百数十年後の姿が確認される。ただその正確な位置は未詳であるが、そのとき高句麗に併合された地域はだいたい漢江以北の一带であつたので、牟水国も漢江より以北の地、あえていえば今の揚州あたりに位置したとみてよからう。³⁷

八番目の「伯濟国」は、百済発祥の拠点、今のソウル付近であつたことは間違いない。近年の考古学的調査によれば、伯濟国はソウル市内の漢江南岸にのこる夢村土城の可能性がやや大きくなっているようである。³⁸ 夢村土城は、その西南で石村洞古墳群、つまり初期百済の王墓とされる積石方形古墳群の所在地に接する。また古墳群のすぐ北に風納里土城があり、その北方の漢江対岸に築かれた阿嵯山城は、夢村土城とはほぼ南北線上にあつて、漢江をはさんで互いに指呼の間にある。今の阿嵯山城が『廣開土王碑』に記録された「阿旦城」であろう。夢村土城あたりの現ソウル市の地が、古くから朝鮮半島中部で最も重要な地点の一つであつたことは、今更いうまでもない。

二二番目の「支侵国」は『日本書紀』応神紀所引の『百濟記』にみえる「支侵」、唐が百済滅亡のあとその故地に置いた「支濤」州・「支濤」縣に当る。これもその確かな位置は未詳という他ないが、当時の大勢の推移からして、だいたい今の洪城、または大興あたりとしてよからう。³⁹ 洪城はソウルに通じる天安地域と、錦江河口の群山とを南北に結ぶ中間

の要衝の地であり、また大興は洪城から西方へおよそ一〇キロのところに位置していて、有名な百済「任存城」の候補地の一つでもある。支倭国はこのあたりに考えて大過ないであろう。

二六番目の「古蒲国」について、これまで提案された候補地がないではないが、まだ確かな比定地はしられていない。日頃この「蒲」字の表記に注意して、同じ『三国志』の中で、或いは同書の各種刊本や一般の古史・古書の類において対比・対照してみたところ、《満》字を「蒲」字に誤り易い性向があるようにおもわれる。ちなみに、宋本の『三国志』魏書韓条もこれを「古《満》国」に写す。私見では、「古蒲」は「古《満》」の誤写である。はたして「古満国」が正しいならば、それは今の公州（百済の固麻・久麻那利・熊津）に他ならない。公州は錦江中流域に位置する百済第二の王都であって、その位置の史的重要性については多言を要しない。

三四番目の「辟卑離国」は、今の金堤に当てられていて、それには疑点がない。百済の故地名として知られた「避城」（百済の碧骨）、『南齊書』東夷傳の「辟中」、さらに『日本書紀』神功紀の「辟中」・「辟支」、天武紀「避城（ヘサシ）」等はみなこの辟卑離の異記である。⁴¹

四一番目の「牟盧卑離国」のうち「牟盧（ムロ）」はだいたい全羅道西部をさす古い言葉であり、それに「卑離」を付したこの国の所在は、やはり今の高敞（百済の毛良夫里）に比定するのが最も適当であろう。⁴²

また、四七番目の「如来卑離国」は、これを今の和順（百済の爾陵夫里）とする比定が注目される。⁴³ 動かぬ比定とおもう。

以上の七国は、馬韓全体からすればごく少数にすぎないが、いずれも

比較的信頼のおける位置比定である。そこでその記録の順序に従い、その順番をたどってみると、明らかに北から南に下ってくるという傾向がみられるのである。この傾向を重視すれば、月支国の所在について、次のような推測が可能であろう。即ち、月支国は一四番目に当るので、八番目の伯濟国（ソウル）と二二番目の支倭国（洪城・大興あたり）の間にかけて、つまり漢江以南の京畿道南部から忠清南道北部にかけて位置していた可能性が最も高い。ここで前記の候補地をおもいおこせば、月支国を忠清南道北部の天原地域か、礼山方面に比定するのが穏当であろう。この地はソウルと大田との中間に位置しており、これを歴史的にみても、先史時代からそれなりの特徴をもつ重要地域として知られる。

このように、天原或いは礼山のあたりが月支国の地理的位置であったとすれば、その位置がもつ政治的・文化的な意味にも注意したい。即ち、月支国は馬韓諸国の程よい中心部に位置したのではなくて、むしろ北方に偏ったところにあった。だが、中国との関係から見直してみると、月支国と樂浪・帶方郡との間には、馬韓の一〇国余りが介在していたことになる。月支国は郡縣に直接隣接していたのではなく、といってその逆に、はるか遠く離れているという距離でもなかった。

魏書韓条に記された中国人の見方によれば、馬韓諸国のうち「其の北方の（帶方）郡に近き諸国は、差（やや）〔中国流の〕礼俗を曉（し）り、其の遠き處は、直（ただ）囚徒・奴婢の相い聚まるが如し」という。これによれば、月支国は囚人や奴隷がいる處などとは異なり、中国流の礼儀をわきまえた人々のいる處であって、従って中国郡縣の動向を察するには、不自由しない程度に近い位置を占めていたことになろう。しか

も、郡縣とは直接隣接しておらず、従ってその政治的・軍事的な圧力に対して不意に、しかも直接対決するという不安に怯える必要のない程度に、適当に遠い距離をとっていたことにもなる。

以上のように、月支国は朝鮮半島中西部の、屈指の要衝に位置していたとおもわれる。その上で注意されるのは、中国郡縣に対してじつに微妙に均衡のとれた位置にあり、さらにいえば、じつに絶妙な政治的・文化的な位置を占めていた。従って、この月支国は、とくに辰王の対外的な史的 성격に注目すれば、その辰王に誠にふさわしい政治的・文化的な国際環境を保障していたと評価できよう。

2 辰王「加号」の対象

さて、第二に検討すべきは、史料(B)の「臣智或加優呼臣雲(中略)秦支廉之號」である。この文章には、何らかの韓族古語を多数の借音漢字で表記した部分があり、格別難解であって、それだけ真意に迫りがたい。以下の私見も単なる一つの解釈にすぎないのであるが、とにかく全部で二二字からなるこの長い称号の検討から始めよう。

その難解さなどがあつてのことからか、一部にこれを『三国志』撰者の陳寿が犯した誤文にすぎないと非難するむきもある。⁽⁴⁵⁾しかし、これを論外とすれば、この称号には幾つかの国名が含まれているという指摘があり、さらにその指摘を前提にして、含まれた国名毎に各首長の職号が記されているという解釈が加えられた。⁽⁴⁶⁾これまでこの称号に関する研究は、幾つかの国名↓職号という組合せを手がかりに進められてきており、この手がかりは尊重されて良いとおもう。

始めに那珂通世は、その称号に臣雲新国・安邪国・狗邪国・廉斯国⁽⁴⁶⁾の四国名を指摘した。これを受けて、白鳥庫吉は各国名に職名を対応させ、①優呼臣雲国↓遣支報、②安邪国↓蹶支漬、③臣離国↓児不例、④狗邪国↓秦支廉という、四組の国名↓職名を指摘した。これが前例となり、枠組みとなつて、近來の研究に引継がれてきている。栗原朋信は白鳥説を多少手直しし、それら四組のうち④はそのまま認めるが、①を臣雲新国↓遣支報、②を安邪国↓蹶支、③を臣漬活国↓離児不例と改めた。③を改めるについては、称号の「漬臣」を「臣漬」の倒記とみた点が注目される。さらに、これを継いだ井上幹夫は新たに廉斯国を加え、称号には合わせて五国が認められるとしながら、また職名に含まれる「支」字が例の尊讓接尾辞「智」・「借」などの異表記であつて、称号の某某「支」はそれぞれ諸国の首長号、実質的には各国の王号を意味すると強調した。首長号についていえば、李丙燾は自ら唱えた陳寿の誤文説とはまた別に、この(B)の称号と、前記した諸韓国首長の種族的・土着的な身分称号とを対照して、(B) 称号の「遣支」は「陰側」に当たり、「蹶支」・「秦支」はいずれも「臣智」の異記、「不例」も樊濊の異記であつて、それらに付記された「報」・「廉」は各首長の個人名だという。細部にいたつては判定の仕様もないが、示唆するところもないではない。

ここで重要なことは、まず、問題の称号に複数の国名を認めるという点では、ほとんど一致していることである。臣雲新国・安邪国・狗邪国の三国は動かないが、近來、これに臣漬活国をも含め、合わせて四国が含まれるという解釈が主流になってきており、強いてこれを否認すべき理由もない。そして次に、それら四国の各国毎に、それぞれ首長たちの

職名が書かれていた可能性の大きい点も重要である。やはり（B）の長い称号は、上記した馬韓と弁韓の四国首長の職号を含んでいるとみてよからう。

四職号を含むこの称号は、その長い長さにもかかわらず、それ自体がひとまとまりの称号、分かちがたい一連の称号と推定される。その推定の確たる保障はないが、「之」字を明記した「加《某某》之號」という表現に注目したい。その表現は《某某》が分割しがたい実体をもっており、それで一連の内容を示すものと考えられるからである。従って、次の問題は「加号」の主体と、その対象となった客体のことであり、この長い称号を加えた者が誰であり、加えられた者は誰であつたかということである。

この問題を考える場合に焦点になるのは、史料（B）冒頭の「臣智」である。この点を考察した研究は少ないが、これまでに、四国の首長たちがこの長い称号を辰王に加え、かれらが辰王を推戴したのだという解釈がある。⁽⁴⁸⁾ 主体は四国の首長たち、つまりそれら四国の臣智たちであつて、辰王は客体であるというのである。だが、それには検討の余地がないでもない。

本条のような《加》字を用いた文章はよくみられる構文であり、他ならぬ魏書東夷傳にも、当の韓場を含めて、

大人《加》狐狸貂白黑貂之裘。（夫餘条）

諸韓国臣智《加》賜邑君印綬（韓条）

などが目につく。夫餘の事例は、前後の事情から、大人が遣魏使だったことがわかる。魏に出発するに際して、裘（皮衣）を《加》えられたの

は大人であり、勿論、《加》えたのは夫餘王であつた。王が主体、大人は客体である。韓の事例も、繰返しのべたように、魏が主体であり、諸韓国の臣智が客体なのであつて、魏が臣智に印綬を《加》賜したのであつた。従つて、いま問題の記事は、「臣智には或いは某某の號を《加》う」と釈読しなくてはならない。臣智が称号を《加》えられた客体であることは、今更いうまでもない。

客体が臣智だとして、その主体は誰であろうか。正しく臣智を月支国の臣智としたうえで、しかし加号の主体を魏と特定する見解がある。⁽⁴⁹⁾ だが、魏を主体として釈読すべき文言は見当たらない。この基本的な事実に加えて、もし魏が加号したものであれば、その称号の表記法や、その称号と率善官との関係などに関する解釈に、かなりの無理が生ずるのではなからうか。まず表記法であるが、漢字の借音表記によつて種族的・土着的な長い称号は、中国文化を天下に体现すべき魏の諸制度になじまず、当の中国人にとつてほとんど理解しがたいものである。次に率善官との関係だが、疑いなく魏が授与した率善官の体系のほかに、その魏が同じ被授与層の臣智らを対象にして、さらに重ねて他の称号を與えたものであろうか、いささか疑問を禁じえない。ましてやその称号というのが、魏制になじまぬものであつた。要するに、客体を月支国の臣智とするのはよいが、主体を魏とみる見解には賛成し難い。

また、客体を正しく月支国の臣智としながら、その臣智がすなわち辰王自身だという見解もある。⁽⁵⁰⁾ つまり、この場合は主・客は一体だということなのであつて、かれは問題の称号を賜與され、かつ自称もしたということになる。しかしこれでは、事態の整合的で具体的な理解が困難である。

前にあげた夫餘条の大人の事例や、韓条の諸国臣智の事例などでは、当然ながら加えた主体は別にいた。問題のこの場合も、月支国の臣智に称号を加えた主体が、加えられた臣智とは別に実在したと考えるのが自然であろう。私見では、月支国には在地首長としての臣智がおり、その他に月支国に治所をおく辰王もいた。この辰王がその臣智に加号したのである。

重要なのは、対外的な性格をもった辰王が、在地首長としての月支国の臣智に対してあの長い称号を加えたということであり、月支国においては辰王が上におり、臣智が下に位置するという形態をとる二重構造が形成されていたことである。権力の二重構造の問題は、朝鮮古代史において検討すべき大きな一般的課題であるが、その意味で月支国の場合も注目されてよいであろう。

3 「加号」にみる四国の意義

次に検討したいのは、称号に含まれていた四国の首長のことである。その称号が加えられると、月支国の臣智はそれら四国首長と特定の関係を結んだことが内外に明らかになり、三韓の諸韓国において、それがいわば国際的に承認されたものであろう。その関係の具体的な内容は、もちろん不明というほかない。おそらくそれは、辰王の諸国間調整の権能に基づき、とくに馬韓や弁辰の有力な複数国を特定し、まず辰王を中心として形成された関係だったのではなからうか。辰王が加号の主体として登場するのは、おそらくそのためであらう。そして辰王の加号を媒介にして、月支国臣智は特定された諸国首長との間に関係を結んだのであ

らう。ただその実態などはすでに推測の埒外にある。

そこで重要なのは、特定の関係を結んだ諸韓国が四国であり、四國だけというごく少数のものに特定され、具体的には臣雲新国・臣漬活国・安邪国・狗邪国に特定されていたということである。私見によれば「四」にはさしたる意味がなく、状況に応じて多少増減したと考えるとよいが、いずれその数は特定・少数に止まっていたものであろう。そこには、明らかに、選択の意志が働いているのである。

その選択の結果が、上記の四国であった。「臣雲新国」と「臣漬活国」の位置については、例えば前者を今の天安地方とし、後者を今の安城地域の陽城面一帯に比定する見解がある。⁵⁾ 後者にはそれなりの根拠がないではないが、以下の私見とは大きく異なる。大雑把ながら、列挙順序で見当づける既述の方法によれば、馬韓諸国七番目の「臣漬活国」は先述の八番「伯濟国」の直前なのでソウル近辺、或いはそのやや北方であらう。四六番めの「臣雲新国」はこれまた前述の四七番「如来卑離国」の直前だから、光州付近かと推測される。いずれも正確な位置比定には今後の検討を要するが、両国は辰王治所の月支国を中間におき、北と南に大きくかけ離れて位置していたことは確かである。

また、「安邪国」は同じ魏書韓条に「弁辰安邪国」とみえ、「阿羅」・「阿尸良国」・「阿那加耶」などとも書かれ、『廣開土王碑』や『日本書紀』では「安羅」と記されていて、今の伽耶（新羅の咸安）に当たる。言うまでもなく半島南部に展開した加羅諸国のうち、南海に隣接した主要な一国であった。残る「狗邪国」は安邪国の西方およそ四〇キロ余り、弁辰諸国が展開した洛東江流域の河口に位置していて、今の金海（新羅の金

海小京」に比定される。同じ魏書の倭条にも「狗邪韓国」とあり、また韓条には「弁辰狗邪国」とみえ、「金官国」・「伽落国」・「大駕落」などとも書かれ、『廣開土王碑』に「任那加羅」、『日本書紀』には「南加羅」などと表記された。これらの表記でも分かるように、古くから南海に面した加羅諸国の一大国であり、加羅北部を代表した大伽耶（高靈）に対抗して、南部加羅を代表する大国であった。これら両国はいずれも弁辰に属し、やがて加羅諸国を代表する大国となり、倭との関係にも浅からぬものがあつて、しかもその位置比定は動かない。

以上、四国の位置を検討したところ、次のような特徴が指摘できる。

第一に、四国ともにそれぞれ特色をもつ重要な国々であつた。やがて主要な加羅国に成長していった安邪国・狗邪国には既に触れたが、臣漬活国も活動的な一國であつて、それが辰王の命運に深くかわつていった次第は後に述べる。臣雲新国には格別なことは伝えられていないが、光州付近つまり榮山江流域のあたりは、五世紀前後に百済に併合されるまで、なお独自の文化を保持していたが、そのことはとくに大型甕棺墓や前方後円墳など、各種の考古遺物や遺蹟を通じて広く知られた事実である。^{〔補註1〕}

第二に、四国は一定地域に集中するようなことはなく、むしろ広く分散する分布傾向を呈する。その傾向は、月支国がこれら諸国を吸収し、強く統率する支配体制をとつたというよりは、少数ながら特定の主要な諸韓国を選び、より広い地域と連絡を保ち、広義の交通ネット・ワークを築く、という意図が示されているようにおもわれる。即ち、ソウル付近、漢江下流域あたりの臣漬活国は、辰王にとって大きな関心事であつ

た帯方郡の動向に備える拠点であり、またそれを含めた各国は、それぞれみな各地の韓族の動向を察知する拠点でもあつたと考えられる。

第三に、しかし、あえていえば、四国の分布傾向に或る種の性向が認められる。四国は朝鮮半島の西・南海岸に沿った沿岸部か、沿岸部に近い河川流域に位置したようである。つまりその交通ネット・ワークは、河川・沿岸部を縫って張り巡らされていたものと想定されるのであるが、それがとくに西・南海岸に沿って展開していたこと、かつ、帯方郡を意識した漢江下流域に始まって洛東江下流域に終わることを重視すれば、その先に日本列島の倭がみえてくるであろう。魏書倭条は、倭が属した帯方郡から倭の対馬国に至る道程にふれて、

従（帯方）郡至倭、循海岸水行、歴韓国、乍南乍東、到其北岸狗邪韓国七千里、始度一海、千餘里、至對馬国。

と記述している。それは月支國の辰王がその当時張り巡らしていた幹線ネット・ワークに、びたりと重複するのである。ネット・ワークの拠点到辰韓を含まず、上記の四国は馬韓と弁辰に限られていた。そのことは、称号を加えた辰王の存在が、朝鮮半島の西・南海岸に沿いながら、アジア大陸の中国と日本列島の倭との間に形成されていた交通関係に、とくに深くかわつていたことを示すものであろう。五世紀初頭に倭が高句麗と戦つた海域、つまり『廣開土王碑』永樂十四年甲辰（四〇四年）条にいう「帶方界」も、まさしくこの海域にほかならない。^{〔補註2〕}

馬韓の辰王は絶妙な位置を占めた月支国を自らの治所とし、倭をもとらえる広い視野のもとで、周囲の国際状況に目配りしながら、少数ながらも有力な在地首長と特定の関係を結んでいた。つまり、辰王は月支国

の臣智を掌握し、在地的な二重権力構造を作り上げていたのであるが、その権力構造は本来在地的・種族的な状況に根ざしたものであつて、従つて先に指摘した魏の「率善」官の体系、即ち外来的な中国中心の冊封秩序の体系とは、異質の性格をもっていたといえよう。辰王は、そのような異質の権能を兼ねもつ、特殊な最高首長であつた。

4 辰王と三韓諸国との関係

辰王は馬韓と弁韓のなかの四國と特定の関係を結んでいたが、それをふまえて注意すべきことは、辰王がそれ以外にも諸韓国との関係を作り上げていたらしい事実である。「其の十二國は辰王に属す」という史料(D)が、それを示す。

まず検討したいのは國数の件であるが、これまで提示された解釈では、ほとんどこれを《辰韓十二國》とみるのが普通のようなのである。この辰韓一二國説を支える根拠は必ずしも明瞭ではないが、「辰」字の共通性と「弁辰」王との問題がある。まず前者の問題であるが、これは例の「辰」字の共通性を拠る所にして、「辰」王は「辰」國の王であり、かつ「辰」韓の王であるという解釈であつて、これによれば当然、辰韓の全一二國が辰王に属したことになる。この解釈は辰王が実在したところから行なわれていたようであり、この時期の早さが注意されるが、しかしその解釈は漢字の同字に同義を託し、これを特別視して強調しがちな中国人の附会によるのであつて、それがそのまま史実と認められなかったことについては、既に一言したとおりである。

そこで後者の「弁辰」王の問題というのは、魏書韓条の末尾部分にみ

える「十二國亦有王」の解釈にかかわっている。この記事が弁辰「王」に関して述べていることは間違いない。この弁辰王については、これが弁辰の全一二國を一括支配した一人の《弁辰王》だという古くからの解釈があるが、他方では弁辰一二國の各國に一人づつの《各国王》、合わせて二人の王がいたという解釈も出されている。³²⁾ いずれにしろ、とにかく弁辰には「王」がいたことになる。先の辰韓一二國説はこの弁辰王実在の解釈を承けて、弁辰にそれ固有の「王」がいるのであれば、それと重複して辰王が並びたち、辰王が弁辰諸國に「王」として振舞うはずはなく、従つて辰王に属したのは弁辰以外の一二國、つまり辰韓の一二國に特定される、と考えるのである。

だが、他の解釈の余地もありえよう。私見によれば、韓条末尾に孤立した形で記された「弁辰の」十二國も亦、王有り」という記事の「十二國」は、遇々、史料(D)「其の十二國、辰王に属す」の「十二國」や、辰韓「十二國」などの國数に一致するが、それら相互間に特別な内的関係はないのであつて、弁辰王に関連する問題の記事はそれとは別系統のものなのであろう。即ち、弁辰一二國の王の実体は弁辰諸國の首長層であり、かれら首長の他に「王」がいたわけではないのであつて、ここではいわゆる二次的王として、かれらを在地的な各國「王」とみなし、「王」と記録したものであろう。従つて、かれらの権能が必ずしも辰王のそれと対立し、排斥しあつていたわけではない。しばしば指摘したように、辰王が一元的・排他的な専制権力をふるっていたのではなかったし、むしろ辰王は諸韓國の並立・分立を前提として存続していた。両者は實際に共存していたのであるから、もはや史料(D)の「十二國」を《辰韓

「十二國」に限定すべき必然性はなくなつたことになる。まして、辰王と特定の關係を結んでいた四國の半数が弁辰諸國であつた事實を想起すれば、「十二國」から弁辰を排除すべき特別な理由もないのである。

以上の状況をふまえ、最初の課題に立ちかえてみるに、(D)の「其の十二國」の「其の」とは、明らかに上文の「弁辰韓」を承けており、それは「弁辰と辰韓との」という意味にほかならない。従つて、「其の十二國」とは弁辰一二國と辰韓一二國とを合わせた二四國の内、半数相当の或る一二國のことである。厳密には、残念ながらこれ以上は未詳というほかない。

さて、弁辰・辰韓の一二國は辰王に「属」していたことが確かめられた。先に魏書東夷傳を中心に検討したように、具体的な「属」の在り方の一端については、冊封關係における「属郡」の解釈を通じてふれておいた。つまり東方諸族は「属郡」・「四時」・「朝謁」という定型的な外交儀礼を行い、中国の外臣となり、中国中心の冊封關係に組みこまれていた。この關係は組みこまれた側からみて「属」と表現されたが、組みこんだ側はこれを「統」といったようであり、両者は表裏の關係にあつた。これを手がかりに、漢より以来、同書東夷傳にみえる「統」「属」關係を整理してみると、夫餘・高句麗↓玄菟郡の事例の他、夫餘・高句麗（二例）・韓（二例）↓楽浪郡、倭・韓↓带方郡などの事例が認められる。これは単なる國際的な秩序や威信などの儀礼關係に限られたのではなく、状況によつては物資の供出や労役の徴発などが強制され（濊条）、軍事的な紛争を引き起こす原因ともなつた（韓条）ことが知られる。このような冊封体制に伴う統属關係は、差しあたり「属」の第一型とみなすこと

ができる。

これに対して、「属」の第二型としては、東方の諸種族が展開していた異種族間の統属關係があげられる。ふるくは沃沮が衛氏朝鮮に属した沃沮↓朝鮮の事例を始め、挹婁↓夫餘、沃沮↓高句麗（二例）、濊↓高句麗（三例）などの事例があつた。挹婁の場合は夫餘に重い租賦を責められ（挹婁条）、沃沮の場合は高句麗が沃沮に大人を遣わして監督したり、織布や海産物を含む租賦を徴収したり、或いは美女を召しあげたりした（沃沮条）という。⁽³³⁾

ところが、一二國が辰王に「属」したという、問題の一二國↓辰王の事例は、これら二型のいずれにも該当しない。それは冊封体制下のものではなく、異種族間のそれでもなく、ここでは同じ韓族内において統属關係がみられるのであつて、これはいわば「属」の第三型といえよう。第三型の事例には、倭条の伊都國について記された「皆な女王國に統属す」の場合もあげられる。この伊都國に一大率を置き、女王國以北の諸倭國を検察させ、諸國はこれを畏ればかつたという、周知の關係があつた。ここに統属關係の一端がみてとれよう。

そこで注意したいのは、卑弥呼が治める女王國と男王の狗奴國との關係である。その当時、両國は対立・抗争の最中にあり、その間に魏が介在していたほどであつて、魏書倭条はこの状況について、狗奴國が「女王に属さず」と記録している。つまり「属」で表された統属關係は対立していない關係、抗争していない状態を基本關係として成立するのである。これを上記の「属」の三型と合わせ考えれば、この基本關係の上に多様で具体的な隷属關係が展開しており、統属關係が形成されていたも

のであろう。そこにはたしかに隷属関係を認めてはならないが、具体的な個別な諸状況に依じて、おそらく幅の広い多様性をもっていて、前記した各種物資・労役の徴発や檢察行為などの実例はそれらの一部であり、中国人の眼にとまった顕著な事例であつたとおもわれる。

辰王が弁辰・辰韓一二國と結んだ統属関係については、上記の顕著な事例が一応参考になる。その実情は不明というほかないが、その実情に関連して、いくつか留意しておきたいことがある。その第一は、辰王に統属しなかつた弁辰・辰韓の諸國がなお一二國ほど残つていたことである。私見では、統属した一二國の数は常に不変のものとはおもえないが、しかしおよそ半数の諸國が《辰王に属さず》という状況にあつたわけで、この事実は見過ごせない。辰王が諸韓國を一元的に支配していなかつた実情は明白である。また、辰王が治した馬韓の月支國との位置関係からして、統属関係になかつた諸國はるか遠くの弁辰・辰韓に多く認められるという事実も、それなりに了承できるであらう。状況次第では、例の女王國と匈奴國との対立状態なども参照されなくてはならない。

だが、第二は、辰王と馬韓諸國との間の統属関係の存否である。魏書韓傳には、両者間の「統」・「属」を明示した記事はない。しかし私見によれば、統属関係が弁辰・辰韓に限定されていたとは考えられず、この関係を馬韓にも拡大して解釈してよいのではないかとおもふ。弁辰・辰韓だけに言及して馬韓に触れなかつたのは、辰王の治した月支國を含む馬韓の特殊性に鑑み、むしろ逆説的に、馬韓において統属関係が展開していたことは当然であり、辰王が馬韓諸國の大部分を統属していたことは当然の前提だつたからだ、とは推測できないだろうか。その詳細はわ

からないが、しばらくここでは辰王の統属関係は馬韓諸國を中心に、三韓諸國のなかでかなり広がつていたものとみておきたい。

第三は、辰王をめぐる諸関係とこの統属関係との相互関連である。前に述べたとおり、辰王は(1)魏の率善官の体系をもち、(2)馬韓・弁韓四國と特定関係を結んでいた。いま指摘した(3)統属関係は上記のものととなり、それ独自の隷属関係であつたとみるのが自然であらう。私見では、当時の三韓社会の政治的基盤は諸國の分立・並立にあり、一元的・排他的・広域的な統一国家はまだ成立していなかつたという観点から、複数の諸関係が重複・併存していたものと想定している。従つて、上記の(1)(2)(3)の諸関係の併存は当然、許容範囲内にある。ただ、(1)率善官の体系と(3)統属関係との間には、それぞれ関係の広がりや対象に共通するところもあり、また関係の内実が不明のせいもあつて、その相互関連性は否定しきれない。しかし、いましばらくそれぞれ異質のもの、各々独自の関係とみておくことにしよう。

以上において、辰王は馬韓の月支國に治し、馬韓・弁辰の少数の諸國と在地的な特定関係を結び、さらに辰王を中心に、三韓地域の多くの諸韓國において、多様な形で統属関係が保たれていたものと推論した。

五 辰王をめぐる諸問題

1 辰王王位の継承と非自立性

これまで検討してきたのは、辰王がもつ最高君主としての積極的な側面であつた。しかし辰王は一元的・排他的な権力をふるつた専制君主ではなく、すでに限定された側面をも指摘しておいたが、それと合わせて

考えなければならぬ問題がいくつかあり、それには辰王王位の継承様式と、王位の非自立性をめぐる問題もふくまれる。それはまだ検討されないまま残る辰王史料、「(E)辰王は、常に馬韓人を用いて之と作(なし、世々相い継ぐ。(F)辰王は、自ら立ちて王と為(な)るを得ず。」に記されている。

第一に注目すべき点は、史料(E)に辰王が「馬韓人」と記されていることである。辰王は馬韓出自の人だという意味にとるのが自然であろう。ところが、当該条に裴松之が付した注の(エ)『魏略』逸文には、辰王の非土着性を示す「流移之人」という記述があつて、これまで馬韓人でありかつ流移人であるという事態の整合的な解釈をめぐって議論がおこなわれてきた。その一つの解釈に、辰王を馬韓人というのは馬韓の月支國を治所にした事実を示すにすぎず、辰王は実は辰韓出自の辰韓の王なのであり、かつ辰韓から馬韓へ流移してきたのだという解釈がある。⁵⁴⁾他にも同工の解釈が少なくない。

だが、ここには、例の「辰」字共通を介した心理的呪縛が働いてはいないのだろうか。辰王が辰韓出自だという論拠は魏書韓条にも、その外にもみえない。私見では、上記の記事が史実を示すものならば、その記事のままに、辰王は馬韓内の某國から月支國に移来したのであり、あえていえば辰王は帶方郡に近い馬韓の某國から月支國に南下してきたのであろう。辰王は帶方郡に近い格好の場所を占めていて、北上して朝貢する諸韓国の動向を熟知し、またかれらを迎える帶方郡の実態にも精通していた。辰王の対外的性格は、このような地勢的状况と政治的文化的背景によって培われ、支えられたものであろう。

第二に注目すべき点は、辰王の王位が「世々相繼」されたということである。辰王の王位継承については、まず辰王家が特定されており、その子孫達が相次いで辰王の王位に登り、その王位が世襲されていたという解釈がある。⁵⁵⁾古代君主の王位継承としては常識的な継承様式である。これに対して、辰王の王位は特定一家によって世襲されたのではなく、ただ馬韓人によって継承されただけだという解釈もある。⁵⁶⁾いずれが妥当なのか判断に苦しむが、辰王の場合は必ずしも常識的な様式に固執する必要はないとおもう。いずれにしろ、辰王の王位が複数の世代に受け継がれたのは確かなようであり、このことは辰王の興亡に関連して、あらかじめ留意しておきたい。

第三は、辰王が「自ら立ちて王と為るを得ず」といわれ、はなはだ自立性の少ない君主であつたことである。ここで強調されている非自立性の具体的な様相はわからないが、辰王を牽制する首長勢力がおり、それだけ辰王の存立基盤は強固でなく、そうした実情を無視して王位は持続できなかったであろう。これまで、辰王を強大な専制君主とみ、一元的・排他的な支配を強力に推進するような辰王像を描いてきた多くの見解は、ややもすると辰王のこの非自立性を無視するか、軽視してきた傾向がないでもないが、それが穏当でないことは明らかである。

もつとも、魏書韓条が辰王の自立不能をいうだけでは、いかにも具体性に欠け、不審感を残す。裴松之が『魏略』を引用して、「(エ)明らかに、其れ、流移の人なり。(オ)故に、馬韓に制せらる。」と注したのは、かれもまた同じ不審感をもっていたからに違いない。つまり辰王が馬韓諸國に牽制され、非自立性を帯びざるをえなかったのは、やはりそれな

りの理由があつたのであり、辰王が流移してきた人物であつたからだという。

裴松之はこれで一応納得したようである。だが、さらに推測を重ねれば、『魏略』は(エ)と(オ)との間に「故に」をはさみ、(オ)馬韓に牽制された結果の非自立性を、(エ)非土着性を示す流移の人に結びつけ、この両者相互の因果関係をことさら強調しているが、それは既に『魏略』撰者の魚豢自身もまた、同じ不審を感じていたからかもしれない。辰王を「自ら立つを得ず」とするか、「馬韓に制せらる」とするかは評者の主観に委ねたいが、いずれにしても重要なのは、そのような非自立性が辰王の基本的な性格を特徴づけていて、これを無視できないからである。

以上に指摘した非土着性や非自立性は、辰王の史的理解にとって無視できない属性にほかならない。これを辰王の消極的な面として軽視し、或いは無視するよりは、むしろ辰王の史的理解の鍵として重視すべきであらう。

2 中国史書の辰王像

それにしても、辰王の關係記事は不審な記録とみられることが多かったように、中国では多少の混乱を伴って伝えられた。とくに「辰王」については、その原態をとどめないような形で書き継がれていた。

その第一の方向は、辰王の専制君主としての存在をことさら強調するものである。劉宋代の范曄が撰述した『後漢書』韓条や、それを受継いだ『通典』边防一・東夷の馬韓条などがそれであるが、その内容に対する批判については既にふれたし、次節でも述べる。

その第二の方向は、前者とは逆に、辰王の姿が次第に薄れ、やがては霧散してゆくものである。その状況を魏書韓条の原文と対比する形で列記すれば、次のとおりである。

『三國志』韓条…(E)辰王常用馬韓人作之、世世相繼。(F)辰王不得自立為王。『魏略』曰(エ)明其為流移之人。(オ)故為馬韓所制。

『晉書』辰韓条…(E1)辰韓常用馬韓人作主、雖世世相承、(F1)而不得自立。(エ1)明其流移之人。(オ1)故為馬韓所制也。〈卷九七、四夷傳〉

『梁書』新羅条…(E2)辰國王常用馬韓人作之、世相係。(F2)辰韓不得自立為王。(エ2)明其流移之人故也。(オ2)恒為馬韓所制。〈卷五四、諸夷傳〉

『北史』新羅条…(E3)辰韓王常用馬韓人作之、世世相傳。(F3)辰韓不得自立王。(エ3)明其流移之人故也。(オ3)恒為馬韓所制。〈卷九四〉

『通典』辰韓条…(E4)其王常用馬韓人作之、世世相襲、(F4)辰韓不得自立為王。(エ4)明其流移之人故也。(オ4)〔以下欠〕〈卷一八五、边防一、東夷〉

原文の『三國志』に対し、唐代に撰進されたこれら四書の当該条はいくつか文字の出入りがあり、それを厳密に解釈すれば辰王について新事実を示唆するか、と期待されるところもある。しかし細部にとらわれず、上記の諸記事を全般的に比較・対照すれば、独自の原史料に基づいた独自の記事はないようである。肝腎の原文(E)「辰王」は、以下の諸書(E

1) (E4) ではそれぞれ「辰韓」・「辰國王」・「辰韓王」・「其王」（辰韓王か）と変化した続け、また(F)「辰王」がひとたび「辰韓」となる、その後「辰韓」のままに伝えられてゆき、変化しなかった。

最も重要なのは、原文(E)(F)の「辰王」表記が一つとして正しく伝えられなかったという事実である。このことは、中国人にとつて、韓族社会の中での辰王の在り方がいかに理解し難かったか、いかに特殊な最高首長であつたかを示して余りある。残念ながら、後代の諸記事は先行記事を多少不用意に祖述しただけであつて、辰王の事実関係について新しいことはなにも追加していないとおもう。

ただその内で、いささか吟味を要するのは『晋書』である。『晋書』もその大綱において他書とほぼ同じ趣旨であることはいうまでもないが、しかし『晋書』(E1)には、他書には認められずに、そこだけにみえる独自の文字「辰韓」・「主」・「承」があること、かつ「王」字がないこと、その上それら四文字の在りかたが例の『魏略』逸文(『翰苑』註所引)の(カ)辰韓人常用馬韓人作主、代代相承。

に共通していることなどが確認される。もともと、(E1)には辰韓人の「人」がなく、(カ)には「雖」がなく、(E1)の「世世」が(カ)では「代代」になつていて、確かに両書の違いも目だっている。だが、不的確な筆写で有名な現存『翰苑』残卷(西高辻本)のことも考え合わせ、両書の間だけでそれら四文字の在りかたが共通しており、これを単なる偶然として見逃せないのである。この共通性を重視すれば、『晋書』(E1)は『魏略』(カ)によつたものか、あるいは(カ)系記事によつたとも考えられるからである。

原典『魏略』であつたかどうかは別にして、『晋書』(E1)に辰王などの「王」字はないという点、両書共通の特徴である。従つて辰王研究の立場から、上述した魏書韓条とは別にこれらを釈読し、検討しておいてもよいであろう。その(E1)は「辰韓は常に馬韓人を用いて主と作(な)す」といい、「王」に代わつて「主」がみえる。問題はこの「主」の実体である。

辰韓が作つた主にふさわしいと考えられるのは、まず、辰韓諸國の在地首長である。それも、両極端の場合として、諸國の國毎にみなそれぞれ主といわれた複数の在地首長がいた状況と、諸國の中の或る特定の國だけに一人の主といわれた在地首長がいた状況とが想定されよう。しかし、複数首長の場合は、かれらが全て流移してきた馬韓人であり、かつその流移が理由となつてかれら全員が自立できず、全員が馬韓に制せられたことになるが、現実にはそのような事態が諸國で一斉に起こつたとは想定しがたい。より現実的な事態を想定するならば、首長の数が少なければ少ないほど可能性が高くなるであろう。其の意味では、一人首長の場合が無理は最も少ないのであるが、『晋書』(E1) (オ1)が或る特定の一國の、一人首長だけに当てはまる特殊具体的な事例を記述しているようにはおもえない。つまり、諸國の在地首長を主といったとは考え難いのである。

それならば、次に辰韓一二國又はそれに近い多数の諸國が共同して、一人の主を共立したという場合が考えられる。流移の馬韓人を盟主に戴いた辰韓諸國連盟体というような構想になろう。既にみたように、弁辰については、弁辰諸國に君臨する弁辰王の存在を暗示するような記事が

ないでもなかった。私見では、その暗示には従わずに、弁辰各国毎の複数の王と解釈したし、いまこの辰韓の場合には、それを暗示する文言すら見当たらないのである。一步譲って、もし辰韓にそれ独自の一人の主、即ち独自の統一盟主が実在したのなら、あらためてその盟主とあの辰王との関連性が問題になる。辰王は弁辰・辰韓一二國を統属していたので、その辰王と辰韓諸國の盟主とが同時に並存していた状況を説明する必要が生じる。しかも、辰王と盟主との間に、実に奇妙なことには、両者の出自が共に馬韓人、共に流移の人であり、そして共に自立できず、共に馬韓に制せられていたことになる。このような奇妙なほど多くの共通性をもつ二人両立の事態がはたして現実に起こったとは到底おもえないのである。

二人両立が難しいとなると、歴史的事実としてより妥当と考えられるのは、やはり辰王の方であろう。即ち、『晋書』は辰王の文字を残さず、そのこともあつて独自の内容を伝えるかと期待されたが、それは辰王に関連したところでは独自の内容を伝えてはおらず、おおきくいえば魏書韓条とほぼ同じ事実を伝えていたことになる。両書の前後関係、継承関係を考えれば、この結果は当然といえるのかもしれない。

早くから専制君主や集権国家を体験してきた中国人には、辰王に関する情報不足もあいまって、具体的な辰王像を想定することはかなり難しかったようである。そのため、中国史書の辰王像は反対方向に二分していった。一つは中国人に常識的な君主の一人として、強大な辰王像を追求して行き、もう一つは辰王像が矮小化され、むしろ霧散して行く。前述したように、同時代の魚豢や次代の裴松之ですら、不審に感じてい

たふしがある。まして『晋書』を始めとし、唐代に成った上記の四書は統一した辰王像を描くことはせず、それどころか、「辰王」の文字すら後世に伝えなかった。そして現在に至るまでの辰王解釈にもまた、あたかもこの中国史書の二分方向をなぞるような形で、大きく二つの潮流を認めることができるが、これを歴史的に振返ってみても、まんざら故無しとはおもえないのである。

3 辰王興起の事情

辰王の興起と滅亡の軌跡については、辰王自身についてよりも更に漠然としていて、その消長の大略すら明らかではない。信用のおける辰王関係史料も、以上においてすでにすべて検討し終えたところであるが、それら史料を通じてまず確かなのは、辰王が魏書東夷傳のころ（魏代は二二〇～二六五年）に実在した、という基本的な事実である。

これまで提示された見解の多くは、辰王興起の上限が前漢代、あるいはるか前漢以前にまで遡るとする。筆者にはその根拠ははっきり理解できないが、おそらく第一に『後漢書』韓条の記事、

〔馬韓・辰韓・弁辰〕皆古之辰國也。馬韓最大、共立其種為辰王、都目支國、尽王三韓之地、其諸國王先、皆是馬韓種人焉。……初朝鮮王〔箕〕準、為衛滿所破、乃將其餘衆數千人、走人海、攻馬韓破之、自立為韓王、準後絶滅、馬韓人復自立為辰王。

であり、第二に『漢書』朝鮮傳の記事、

〔衛〕滿得以兵威・財物、侵降其旁小邑、真番・臨屯皆來服屬、方數千里、傳子至孫石渠、所誘漢亡人滋多、又未嘗入見、真番・辰國

欲上書見天子、又擁闕弗通。元封二年、漢使涉何譙論、右渠終不肯奉詔。

であるとおもわれる。前者『後漢書』にみえる辰王は即ち辰國の王であり、後者『漢書』によればその辰國は元封二年（前一〇九年）より以前から存続しており、従って、辰國の王たる辰王もはるかそれ以前から存続してきたのだ、ということになるのであろう。そして後者の当該部分は流布本『史記』朝鮮傳に「真番旁衆國」とあるが、宋本『史記』には「真番旁辰國」とあり、この「辰國」が後者に通じるので、その論旨は一段と補強されるかのようにみえる。

しかしこれまで繰返し述べたように、このような辰王＝辰國王説を前提として導かれた辰王の年代観には賛同できない。これを史料に即していえば、まず、『後漢書』は辰王成立の上限を『準後絶滅』の後」とする。つまりその上限は『箕準が衛滿に追われた前二世紀始めより以後、準の地位を継承したかれの子孫が絶滅してしまうまで或る程度の時期が経過してから』、さらにその後』なのであって、いかにも実年代ははかり知れないが、かなりの程度において前漢末期に近付いてゆく。

次に、『史記』・『漢書』によって前二世紀以前の「辰國」を認めるにしても、辰國の君主が「辰王」であったことを証するものは何もない。またその点は『後漢書』でも同じであって、同書も「〔三韓は〕皆な古の辰國なり」といい、辰國が存在していたのは「古」なのであり、むしろ過去の辰國が当時実在していた辰王とは直接関係のないことを明示しているのである。それならば、辰王の実在時期が『後漢書』のいうとおりなのかといえば、実はそうとはいえない。これまでも指摘されているとお

り、そもそも同書は辰王に関する独自の内容を伝えているとはおもえないからである。

辰王の興起を前漢代、或いはそれ以前に想定すべき論拠は格別ない。そこで注目されるのは、前漢から後漢にかけて辰王連合なるものが形成され、正始七（二四六年）ごろに消滅した、とする井上幹夫氏の見解である。⁵⁷⁾ まず始めに、辰王の興起についていえば、前漢から後漢の間に辰國が変化して、新に辰王連合が結成されたとし、その辰王とは諸韓国の中の「廉斯國の王（首長）」であったという。

廉斯國については、『魏略』（魏書韓条所引）に、王莽の地皇年間（紀元後二〇～二三年）、「廉斯鑪」つまり廉斯國首長の鑪なる者が楽浪郡に來降し、韓族に捕らえられた漢人の救出に功績をあげたとたつえられる。

『後漢書』韓条（前掲）にも、後漢・建武二〇年（紀元後四四年）に、「廉斯人蘇馬謨」らが楽浪郡に貢獻し、「漢廉斯邑君」の印綬を受け、四時・朝貢することになったとある。蘇馬謨も鑪の後を承けた廉斯國の首長であったとみてよいが、廉斯國がその当時の諸韓国のうちでかなり有力であり、とくに楽浪郡と緊密な関係を維持していた注意される。井上氏によれば、それまで存続してきた辰國は蘇馬謨の朝貢を契機に解体されたが、辰國の君主であった辰王はそのまま存続し、ただ辰王は廉斯國から月支國へ移住したとされる。

辰王の興起に関するこのように具体的な指摘は評価される。しかし、この見解も辰王が辰國に連結されており、その点で賛成し難い。それに、廉斯國の首長を辰王とみなす理由は、慎重な検討を要する。両者を同一人とする主な理由が、首長は後漢初期に「邑君」を授けられ、辰王は魏

の《邑君》を與えられた結果、両者が同じ邑君号をもち、同じ「臣智」階層に属するという主張にあるからである。既に論じたように、辰王には《邑君》が與えられた事実もなければ、そもそも冊封された証拠もない。そのうえ、辰王が後漢初期に遡って実在したという形跡や「臣智」と称した形跡が確認されるというわけでもない。

しかし、辰王が魏代に先行して存在しなかったという確かな証拠もない。むしろ魏代になっても辰王の「魏率善官」の他に、後漢に由来する「帰義侯」が生き残っていたこと、また史料(E)「世世相繼」や(カ)「世代々相承」とあるように、複数世代による辰王継承が無視できないことなどを考慮するならば、辰王が後漢代に実在していたことを認めるのにやぶさかではない。

ただ、既に指摘しておいたように、辰王の興起にふさわしい具体的な史的環境としては、後漢末の初平元年(一九〇年)に公孫度が遼東地方を制圧し、その後三世四代の約五〇年間続いた、いわゆる公孫氏政権期が考えられるのである。関連して重要に思えるのは、その公孫氏が新たに設置した帯方郡であった。³⁹⁾ 魏書韓条に、

桓・靈之末、韓・濊疆盛、郡縣不能制、民多流入韓國。建安中、公孫康分屯有縣以南荒地、為帶方郡、遣公孫模・張敞等、收集遺民、興兵伐韓・濊、旧民稍出。是後倭・韓遂属帶方。

とあって、後漢はその末期の混乱期に楽浪郡の支配や漢・濊の掌握に苦しんだが、公孫氏政権を確立した公孫度の子、康の時代になって、楽浪郡の屯有縣より以南の諸縣の地に帯方郡を新設し、郡縣遺民の収集に尽力した。そのとき康は兵を出して漢・濊を討ち、後漢遺民の収集に成功

し、さらに諸種族の再掌握にも成功したようであって、漢・倭もまた後漢の楽浪郡から新しく帯方郡に移属したという。つまり、公孫氏政権による帯方郡の新設を契機として、後漢代の南方諸種族への統治策はその面目を一新し、統制力が強化されたのであった。それは「建安中(二〇四―二二〇年)」のこと、康が執権した(二〇四年)直後の事件であった。

辰王が登場したのは、ちょうどそのころであった。してみれば、三世紀初頭における軍事力の行使、帯方郡の新設、諸種族統治の強化など、公孫氏政権が進めた一連の国際的な政策の一環として辰王が登場したことになる。換言すれば、辰王は韓族統治の強化を狙う公孫政権の支援のもとに、諸韓国における対外的な在地機関の最高首長として登場したものでなかろうか。辰王興起の時期とその事情については、以上のように帯方郡新設を主軸にして考えられる。

このように考えると、魏代の辰王をめぐる消極的屬性の由来の一端が、いかほどか了解されるであろう。例えば、公孫氏は自らの政権に親密な韓人を辰王に仕立て、辰王位を継受させたり、種々交渉したりしたとすれば、辰王は対外的な在地機関の首長として機能するかたわら、見方によつてはそれが自立不能の状況ともみえたに違いない。また、魏が公孫氏政権を破り、帯方郡を修復したとき(二三八年)、魏が辰王を直接把握しなかったのは、統治の対象を個々の諸韓國首長に定めたことにもよるが、それもあって辰王が公孫氏と密接な関係を築いていたからではなかろうか。

4 辰王滅亡の背景

そこで次の問題は、辰王の滅亡である。井上氏はそれを正始七年（二四六年）と直指するが、この見解は重視されてよいとおもう。そこで検討すべきは、次の魏書韓条（宋本）の

部從事呉林、以楽浪本統韓國、分割辰韓八國、以與楽浪、吏訳転有異同、臣幘沾韓忿、攻帯方郡崎離宮、時太守弓遵・楽浪太守劉茂、興兵伐之、遵戰死、二郡遂滅韓。

である。このとき魏は諸韓國との間に紛争をおこし、帯方太守が戦死するほどの事態がおきて、帯方・楽浪の「二郡が、遂に韓を滅ぼす」結果になったという。韓族社会にただならぬ一大事件が突発したのである。

三韓諸國に様々な形で広くかわつていた辰王の在り方から考えて、この滅韓事件は辰王と深い関係をもっており、むしろ辰王の決定的な命運に直結していたものとおもわれる。ただ、この記録は歴史史料として肝腎な年次を明示していないが、既に所説があるように、その年次の欠を補ったうえ、さらに事件の実相をも補うのが、『三国志』卷四・齊王紀の

正始七年春二月、幽州刺史毋丘儉討高句麗。夏五月、討濊貊、皆破之、韓那奚等數十國、各率種落降。

である。つまり、それらの所説によれば、毋丘儉による高句麗の征討と濊貊の撃破は「正始七年」ではなく、その前年の正始六年（二四五年）に繰上げるべきであり、また来降主体である「韓の那奚」は辰韓諸國の一つ「冉奚」國に当たり、またこの那奚など諸韓國の魏への来降は記事の示すまま「正始七年」でよく、そしてこの来降事件は前記した滅韓事件の結末を示すものにほかならない、というのである。⁽⁶⁰⁾ 考証は綿密で

あつて、この解釈でよいとおもう。

そこで、注意したいのは、紛争の主体とその契機である。主体についていえば、帯方郡を攻撃して帯方太守を戦死させたのは、汲古閣本『三國志』に「臣智激韓」とあるが、宋本には「臣幘沾韓」國とあつて、近來この方を探る見解が多い。その国名には異表記（誤記・誤刊を含む）

もあつて、本来的な表記の当否は判断しかねるが、これが或いは馬韓諸國の一つの「臣漬活國」に当たるとされ、⁽⁶¹⁾ 或いは月支國の臣智に加えられる称号中にみえる馬韓の《臣漬》國に同定される。⁽⁶²⁾ みな馬韓の同一國を指すことになる。このたびこの一小國が帯方郡と紛争をおこし、中心勢力となつてこれに反応したのであるが、この小國首長が辰王や月支國の臣智と特定の関係を結んでいた事実は重視される。紛争・反抗に関連する諸史料に辰王は登場せず、辰王とこの事件との具体的なかわり方は一切不明であるが、その背後に辰王がいたことは認めてよからう。

紛争の直接的な契機については「吏訳転じて異同あり」といい、郡縣官吏と諸韓國との通訳を介した誤解をあげている。誤解の内容ははつきりしないが、この時の基本政策は辰韓八國を帯方郡から楽浪郡へ移属させることであつた。これは楽浪郡による諸韓國の直接支配の強化を意味し、それが原因で紛争・反抗がおきたと解釈するむきもあるが、その実態は八國の朝貢先を帯方郡から楽浪郡へ移そうとしただけであつて、例の「属郡」の移動にほかならなかつた。先ごろ、公孫氏政権がそれまで楽浪郡に統属していた辰韓諸國を新設の帯方郡に移属したのに対し、今後は、公孫氏政権を倒した魏がそのうちの八國を分割し、もとの楽浪郡に移属しようとしたのである。

最初に反応したのは、直接移属の対象となった辰韓の八國ではなくて、馬韓の一國即ち臣漬活國であった。前述したように、その位置は現在のソウル付近・漢江下流北岸あたりかとおもわれるが、その地勢上の意義は注目に値する。第一に、月支國と隣接していた点である。魏書韓条が馬韓諸國を列挙した順序は、臣漬活國が七番目であり、次の八番目が月支國であつて、私見によればこの順序は両國が隣接していたことを示す。月支國が辰王の治所であり、辰王が月支國の臣智を掌握し、臣漬活國を含む少数國と特定關係を結んでいたことはいままでもない。つまり、臣漬活國は月支國に隣接していて、月支國を支援した馬韓の有力國であつた。この國がまず反応したことは、辰王との密接な關係において見過ごせない。

第二に、帶方郡との位置關係である。月支國と隣接したことを念頭におけば、前に月支國について指摘したことがそのまま当てはまるであろう。即ち、臣漬活國は帶方郡に対して実に微妙に均衡のとれた政治的・文化的な位置を占めていたのである。裏をかえせば、微妙な均衡が失われた場合、常に大事に發展する危険性をかかえていたともいえる。そしてその均衡が八國移属をめぐる何らかの誤解によつて破れたのであつた。帶方郡との微妙な關係において、この國が始めに動いたことには一理あるといえよう。

紛争ははじめ臣漬活國から起こつたが、直ちに移属の対象となつた辰韓諸國をも巻込んで、帶方郡への反抗が拡大した。それは「那奚等数十國」つまり那奚國（辰韓の冉奚國）を始めとする多数の國々が来降したという、この事件の結末に照らして明らかである。その背後には、当然、

辰王がいたとおもわれる。

魏の楽浪郡への辰韓移属策は、これまで辰王が掌握していた対外的な調整機能を損なうものであり、意図伝達の誤解も加わつて、きわめて重大な政策変更と受取られた可能性が大きい。今度の移属策は公孫氏政權いらい続いてきた在地秩序の変更に通じ、公孫氏政權に支持されて登場した辰王自身の存立基盤の変更をも意味するのであつて、或いは辰王にたいして致命的な打撃になると受取られたのかもしれない。そのような危機感辰王だけではなく、辰王や帶方郡とそれぞれ關係をもつてきた諸韓國にも生まれ、ことさら重大に受取られたことであろう。ここに、二四六年に三韓約八〇國のうち数十國が決起したという、大規模反亂の國際的・政治的な基盤の一つがあつたとおもう。

それだけに、帶方・楽浪二郡が「遂に韓を滅ぼ」した結末は、魏の断固たる決意を示しており、数十國の来降は三韓諸國におきた大きな変動を暗示する。「那奚」國は移属対象とされた辰韓八國のうちの有名な一國であり、八國の移属は結局実施されたことであろう。⁶⁴だが、その變動の最たるものは、辰王自身の滅亡にほかならなかつた。来降した数十國は三韓社会の諸國として、しばらくはそのまま存続していったとおもわれるが、辰王はその後再び姿を現すことはなかつた。

辰王の史的興亡の実情は容易にとらえ難いが、一般的には後漢代に、より限定的には公孫氏政權期の三世紀初頭のころ、二〇四年直後のころの帶方郡新設を契機に興つたとおもわれる。その辰王は二三八年の魏による帶方郡の収復に合わせて転身したが、二四六年の朝貢權移属に際しておこつた韓族諸國の大反亂と、その終結の過程で決定的な打撃をこう

むり、遂に滅亡したものとおもわれる。辰王が実在した時期は、これを長くみても四三年間、半世紀にも満たず、魏の朝鮮半島進出からわずか九年後の滅亡であった。ただしその期間は、辰王位が「世々相い継ぐ」に不十分な程度でなかった点を指摘しておきたい。

六 結言

以上四章にわたり、『三國志』魏書・東夷傳の韓条によりながら、三世紀当時の三韓社会の辰王と臣智・邑借を取りあげて、それらの実像に迫り、史的性格を検討してきた。

三韓の在地社会で最も基本的な支配階層の身分称号とみなされる臣智と邑借は、それぞれ《臣たる者》と《邑を治める者》という語義であった。中国が朝鮮半島に楽浪郡など四郡を設置した前漢より以来、中国に朝貢・朝謁する諸韓国の首長たちが中国郡縣の長官に（理念的には皇帝に）対して臣服し、自ら臣と称したことを前提に、在地社会の政治的成長とあいまって、比較的大きな各國首長層は「臣智」と自称するようになり、それが定着して、その後から臣智は大首長の伝統的な称号として用いられてきた。

中国の郡縣支配が継続する過程で、中国から邑君・邑長の爵号が授與されたことなどを契機として、より広範な首長層が臣智に次ぐ「邑借」の称号を自称するようになった。臣智・邑借はあくまで在地的な身分称号であり、その意味では三世紀当時の弁辰・辰韓に固有な陰側・樊濊・殺奚などと異なるところはない。しかし際立った特徴は、臣智・邑借という称号の登場が中国の郡縣支配と結びついており、それらがいわば国

際的な交流を背景にして生まれてきたということである。わけでも大首長層が臣智を自称し、《臣たる者》と自認していたことは、その国際的な背景の意味を象徴しているといえよう。

首長層が臣智や邑借など、各種の身分称号を称していたことは、諸韓国の間に生じていた政治的・身分的な格差をはっきり示しているが、しかしその格差は厳格な上下関係を規律したものではなく、政治的身分制（例えば後代の官位制）の成立を意味するものでもない。むしろ、この当時の基本的特徴は、韓族社会が数十國に分立・並立しており、まだ広域的な統一國家の成立にまで至っていなかったところにある。

従って、逆に、必ずしもこの基本的特徴になじまないようにみえる「辰王」は、一方では強大な専制君主と目され、とくにわが国では机上の誤操作から生じた幻想として顧みられないが、現在、このように対照的な評価のただ中にある辰王像に、かえって深い興味を覚えざるをえない。

さて、辰王は決して幻想の産物などではなく、三世紀当時の三韓社会に実在していた。かれは帯方郡にほど近い要衝である馬韓の月支國を治所とし、月支國の臣智を掌握していて、多様な形で三韓の多くの諸國とかわりあっていた。まず馬韓・弁辰のうち、半島西・南の海岸部に沿った要衝の四國と特定の關係にあり、交通ネット・ワークの中心となっていたようである。また、辰韓・弁辰のうちの半数に当る一二國や、おそらく少なからぬ数の馬韓諸國をも含めて、多くの韓國を統属していたものとおもわれる。さらに、魏から「率善官」を冊封された諸國首長層を中心に、諸國間の利害關係を調整しながら、対外的な最高首長として機能していたようである。このような辰王の在り方は、まだ小国分立と

いう基本的特徴を打ち破るものではなかったが、しかし諸國間の連携をひろげ、連携を深めて行く方向を秘めていたのであって、これは軽視されてはならない。

だが、その上でなお留意すべきことは、辰王の存立基盤がはなはだ脆弱であり、土着性がうすく、なにより自立性が低いとみられた点である。それは辰王の対外的性格にも関連するとおもわれるのであって、諸國間の連携を深める方向も、当時の国際的な状況との関連を無視しては理解し難いであろう。そのような辰王の脆弱性は当初から抱えられていたものとおもわれるが、それは魏の公孫氏打倒、楽浪・帯方兩郡の収復、そして辰韓八國分属策を契機として起こった大反乱で暴露された。魏は諸國の首長層を対象に定めて反乱を收拾し、その過程で辰王は自らを誇示する機会もなく滅亡し、そのまま埋没して、そのあと再起することはなかった。

辰王の終末は二四六年、数十國に達する諸韓國の反乱と魏による反乱鎮圧のうちに認められるが、辰王の始源ははっきりしない。私見によれば、辰王は遼東の公孫氏が韓族を掌握するため、その支援を受けて登場した最高君主であり、おもに諸韓國の対外的調整を担っていたものとおもう。あえてその時期を示すとすれば、公孫康が帯方郡を新設した二〇四年直後のころであろう。従って、魏が公孫氏政權を倒して帯方郡を収復した二三八年より以後は、辰王の魏に対する国際的な立場はじつに微妙なバランスの上にあり、魏は基本的に施策の対象を各国の首長層に定め、かれらを冊封したりしたので、辰王を無視する結果となった。辰王は公孫氏政權らしいの一部首長をかかえ、さらに魏の冊封を受けた首長

たちをもつなぎとめながら、伝統的な辰王の地位の維持に努めた。しかし、その地位を損なうものと受取られた魏の辰韓八國移属策を契機にして、上記のように二四六年の反乱、反乱の鎮圧、そして辰王の滅亡にいたったのである。その間、辰王位の継承も認められるが、およそ四〇年余りの興亡にすぎなかった。

本論は魏書・東夷傳のうち、韓条にみえる三韓の臣智・邑借、とくに馬韓の辰王に着目し、その実態と史的性格を明らかにしようとした。しかしふり返ってみるに、なおそれらの実像は明確とならず、なお多くの疑問を残したままであって、ここに述べたものは単なる一つの私積であり、問題提起にすぎない。関連して今後の研究の進展を期待したいが、これらの問題を解明するにあたり、国際的な広い視野からの考察が不可欠であることを強調しておきたい。

註

- (34) ソウル説は申采浩「朝鮮史研究草」(『丹齋申采浩全集』下巻、前掲、九一頁。ただし同「朝鮮上古史」、同上書上巻、九三頁では公州に比定する)、仁川説は千寛宇「目支國考」(『韓国史研究』二四、一九八九年五月二六～二九頁)など、天原説は李丙燾「韓國古代史研究」(前掲、二四二～二四八頁)、礼山説は金貞培「目支國小考」(『千寛宇先生還暦紀念韓國史論叢』ソウル、正音文化社、一九八五年、二二八～二三二頁)、羅州説は崔夢龍「考古学的側面からみた馬韓」(『馬韓・百濟文化』九、イリ、一九八六年十二月、一二～一四頁)などで主張されている。
- (35) 馬韓諸國の現地比定を代表する試みには、李丙燾「韓國古代史研究」(前掲、二六二～二六六頁)、千寛宇「馬韓諸國の位置試験」(『東洋学』九、ソウル、一九

七九年一〇月）があげられよう。

(36) 拙著『高句麗史と東アジア』（前掲）第一章。

(37) 牟婁国の位置について、註(35) 所掲の李丙燾著書は水原（高句麗の買忽）に、千寛宇論文は揚州（高句麗の買肖）に比定していずれも有力であるが、どちらかといえば揚州説に賛成したい。先年、買肖城が議政府の北六キロ、楊州郡州内面南坊里の山中で確認されたと伝えられたが、その詳細は不明である。

(38) 考古学者の表現はいずれも慎重であるが、やはり夢村土城が最有力とおもわれよう。例えば『特別展 百済王宮址出土遺物』（プロ、国立扶餘博物館、一九九〇年）は、百済王宮の所在が夢村土城（ソウル）―公山城（公州）―扶蘇城（扶餘）のように三遷したとのべている。

(39) 鮎貝房之進『雑考』第七輯（日本書紀朝鮮地名考）上巻（国書刊行会、一九七一年復刊、三三五―三三六頁）は洪城、また註(35) 所掲の李丙燾著書をうけて、千寛宇論文も大興とする。

(40) 註(35) 所掲の千寛宇論文は、これを「古浦国」のままで、第三の百済王都の扶餘（百済の所夫里・居拔・俱拔）に比定して注目される。

(41) 註(35) 所掲の李丙燾著書・千寛宇論文、及び註(39) 所掲の鮎貝著書もみな金堤に従う。

(42) 牟婁（ムロ）については、末松保和『任那興亡史』（吉川弘文館、一九四九年、一二二―一二三頁）参照。註(35) 所掲の李丙燾著書・千寛宇論文は共に高敞説をとる。

(43) 申采浩『朝鮮史研究草』（『丹齋申采浩全集』下巻、前掲、九〇頁）。註(35) 所掲の千寛宇論文はこれに従う。

(44) 李丙燾『韓國古代史研究』（前掲、二七九頁）。

(45) 那珂通世『外交釋史』卷二（『那珂通世遺書』大日本図書、一九二五年、二九頁）、白鳥庫吉『漢の四郡疆域考』（『白鳥庫吉全集』三、岩波書店、一九七〇年、三一八頁）、栗原朋信『邪馬台国と大和朝廷』（前掲書二一八―一九九頁）、井上幹夫『魏志東夷傳にみえる辰王について』（前掲書六一八―六一九頁）、李丙燾『韓國古代史研究』（前掲、二七八―二七九頁）。

(46) 註(45) 所掲の那珂著書は、称号のなかの「支廉」を「廉支」の倒記とみて、それが前漢代から聞こえた辰韓の「廉斯国」に当たると解釈した。ちなみに、廉斯国は魏書韓条には見当たらない。

(47) 註(19) 所掲の井上論文は称号のなかの「廉之」に注目し、註(46) のような倒記説とは関係なく、普通による「廉斯国」を主張している。この廉斯国だけには対応すべき職名がない、という点にいささか不審を覚える。また、私見では「之」字を漢字借義で解釈すべきであって、これを職号の一部とは考えず、借音表記ともおもわない。

(48) 井上幹夫『魏志東夷傳にみえる辰王について』（前掲書六二二頁）。

(49) 三品彰英『史実と考証』（前掲誌六四頁）。

(50) 三上次男『南部朝鮮における韓人部族国家の成立と発展』（『古代東北アジア史研究』第一編第三、吉川弘文館、一九六六年）。

(51) 李丙燾『韓國古代史研究』（学生社、一九八〇年、二五〇頁・二五四頁）。

(52) 弁辰王説に那珂通世「三韓考」（『外交釋史』卷二、岩波書店、一九五八年、一三〇頁）、栗原朋信『邪馬台国と大和朝廷』（前掲書二一四頁）などがあるが、各国王説には李丙燾『韓國古代史研究』（前掲、二七〇頁）がある。

(53) 拙稿「魏志東夷傳にみえる下戸問題」（前掲）。

(54) 栗原朋信『邪馬台国と大和朝廷』（前掲書二一一―一二二頁、一二五頁、一二

七頁。

- (55) 註(54) 所掲の栗原論文(前掲書一一四頁)。
- (56) 末松保和「新羅建國考」(前掲書一二九頁)。
- (57) 井上幹夫「魏志東夷傳にみえる辰王について」(前掲書六二一〜六三三頁、六三五〜六三八頁)。
- (58) 公孫氏政權については、西嶋定生『中国古代国家と東アジア世界』(前掲)第二編第三章を参照。
- (59) 帶方郡の設置をめぐる諸情勢については、池内宏「公孫氏の帶方郡設置と曹魏の楽浪帶方二郡」(『満鮮史研究』上世編、祖国社、一九五一年) 参照。
- (60) 那珂通世「外交釋史」卷二(前掲書八一頁)、池内宏「公孫氏の帶方郡設置と曹魏の楽浪帶方二郡」、同「曹魏の東方経略」(共に『満鮮史研究』上世編、前掲、二四四〜二四八頁、二五七頁)。
- (61) 末松保和「新羅建國考」(前掲書五一八〜五一九頁、註65)。
- (62) 栗原朋信「邪馬台國と大和朝廷」(前掲書一一八〜一一九頁)。
- (63) 池内宏「公孫氏の帶方郡の設置と曹魏の楽浪帶方二郡」(前掲二四四頁)。
- (64) 『三國志』卷四・陳留王紀の景元二年(二六一年)条に「楽浪外夷韓・濊・貊、各率其属朝貢」とあつて、このとき朝貢した「外夷の韓」は必ず「楽浪」郡

に至つたのであり、その「外夷の韓」とは一五年前に帶方郡から楽浪郡に分割・移属された辰韓八國の後身をいうのであろう。

- (補注1) 有光教「羅州潘南面の発掘調査」(昭和十三年度古蹟調査報告)一九四〇年、『羅州潘南古墳群総合調査報告書』(国立光州博物館 光州、一九八八年)、成洛俊「全南地方の長鼓形古墳の築造規格について」(『歴史学研究』一二、ソウル、一九九三年六月)、林永珍「光州月桂洞の長鼓墳2基」(『韓国考古学報』三一、ソウル、一九九四年一〇月)、東潮「梁山江流域と慕韓」(『考古学研究会四十周年記念論集 展望考古学』一九九五年六月)。
- (補注2) 通交ネットワーク東端の倭を念頭におけば、近年発掘された全羅北道扶安の竹幕洞祭祀遺蹟が注目される。出土した石製模造品等の各種遺物は倭人の往来を示しており、辺山半島突端部というその所在地は梁山江流域に近く、西・南海沿岸の要衝を占めていて、その年代は五世紀前半にまでさかのぼるといふ。韓永熙ほか「扶安竹幕洞祭祀遺蹟発掘調査進展報告」(『考古学誌』四、一九九二年)、補注(1)所掲の東論文(二四五〜二四六頁)、『海と祭祀―扶安竹幕洞祭祀遺蹟―』(国立全州博物館、一九九五年)。

Chin-wang and Sinji in Sam-han Society

TAKEDA Yukio

The “*Samgukji*” 三国志 in the *Uiseo*’s 魏書 account of the eastern barbarians (*Dongijeon* 東夷傳) is the oldest, most systematic source material concerning tribal society in *Sam-han* 三韓 during the third century. The part of the “*Samgukji*” concerning *Sam-han* records the existence of a king by the name of *Chin-wang* 辰王 and heads of smaller principalities called *sinji* 臣智. However, the interpretations of *Chin-wang* have been varied, and no authoritative conclusion has been reached. On the other hand, there has been almost no discussion concerning *sinji*. In the present paper, the author investigates the historical character of these figures.

First, such figures as *ūpja* 邑借 and *sinji* were terms that came into existence as the result of very early international relations with China and indicate the political statuses of chieftains in small principalities. Next, *Chin-wang*’s historical character is very complicated and difficult to figure out, but it is thought that his political base existed in the small principality of *Worji-guk* 月支国, located in *Ma-han* 馬韓, and that he concluded close relationships with the chieftains of small principalities, over which he established himself as paramount chieftain. By balancing the interests of these principalities, he became a king with a foreign diplomatic function.

However, the basis of *Chin-wang*’s kinship was very weak. Unable to bring all three *hans* under his authority, he soon disappeared during the latter half of the third century. In any case, the actual existence of *Chin-wang* cannot be refuted, and he should be historically evaluated as an important historical precedent to the formation of the ancient Korean states. Therefore, in his investigation of the historical character of such figures as *Chin-wang* and *sinji*, the author emphasizes the importance of considering their connection to the international situation of the time.